

今年の夏の甲子園は熱かった。エンジョイベースボールを掲げる慶応義塾高校の優勝は野球好きでなくとも多くの人の心を惹きつけただろう。髪型自由、監督との近い距離、何より高校野球を変える！という斬新な目標。普段、高校野球をあまり見ない私でさえ、目が離せなかった。

次男（小5）が在籍している少年野球チームにもその「エンジョイ」のうねりが押し寄せてきている。数人の親がある監督の指導方針に対して、待ったをかけたのである。所属するチームは45年続く老舗であり、指導方針はエンジョイベースボールとはかけ離れた怒声が多く、褒められることはほとんどない。かと言って、そこまで話題になるほどの成績を上げられてはいない。

そして、今年の夏に次男はついに心が折れた。野球に行かないと言ってきたのだ。コーチを務める夫と修羅場になり親子3人で涙した。「野球を好きかどうかわからない」、その言葉を聞いて私はたまらない気持ちになった。試合ではいつも監督の顔色を気にしてミスに怯え、ヒットが打てなくてもフォアボール出塁に喜んで、そんな次

男を見て私は絶対言うてはいけないことを言ってしまった。「あなたはスポーツをしていない」と。その瞬間、次男の目が真っ赤になり頬に大粒の涙が流れた。親として最低なことをしてしまった。そう、心を折ったのは私である。

## エンジョイベースボールとは？

末次 聡子

（すえつぐさとこ）  
京都市在住

私は典型的な「スポ根」の持ち主だ。小中高の部活で主将を務めた。中学では顧問の先生によるビンタが当たり前だった。だが、何より指導者への熱い信頼があった。怒られても自分はこの人からある程度は認められているはず、成長させてくれるはずという期待があった。そして今では非常識と考えられている指導方針による厳しさを乗り越えた経験が社会人になってからの私のアイデンティティを支

えてくれていたりする。

実のところ私は次男に少々怖くてもその監督の厳しい指導を乗り越えていけるぐらいのメンタリティーを形成していったほしいと思っている。監督に認められるぐらいの実力を手に入れるために努力できる人間になってほしい。なぜならきっと慶応義塾高校の青年たちが用いる「enjoy」には逆境や困難に立ち向かうクリエイティブさ勇敢さ、「力を出し切る」という精神が土台になっているのではないかと思うからだ。ただ「楽しい」では事を成し得ないと思う。

何が正解か何が正義なのかわからない。こういった価値観の分かれる問題にはいつも「対話が必要ですね」というまとめが最後に添えられる。対話の先に何があるのだろうか。やはりそこは人間。一筋縄ではいかない。

